

子ども臨床心理実地研究の意義に関する一考察

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科・講師)

A Study on Significance of Practical Research of Children's Clinical Psychology

Ito, Kanako

Abstract

The purpose of this study is to investigate what significance that practical research of children's clinical psychology had on the students of Kamakura Women's University, and to examine the individual career decision-making process. The relation of student ratings of teaching to student self-ratings and satisfaction with the class are also analyzed.

As a result, it was made clear that many students were satisfied with the class. And this suggested that there is a necessity for the provision of career support which enables them to connect experiences of clinical psychology to their careers, and also the need for well-directed career counseling for our student.

Keywords : practical research of children's clinical psychology , career decision-making process, student ratings of teaching

キーワード：子ども臨床心理実地研究、進路選択過程、学生による授業評価

I. 問題と目的

臨床心理学分野においては、学生にとって、机上での学習のみならず、心理臨床現場での研修や実習などという形での実践経験も大変有益である。しかし、心理臨床の実習や研修に関するモデルは、日本ではまだ確立されていない。

では、心理臨床の実習の現状はどのようなになっているのか。先行研究には、学部における現状についての研究は見当たらず、臨床心理士養成の大学院に関する研究しかない。

その中で、日本心理臨床学会職能委員会 (2001) の研究では、大学院を併設している49大学の心理臨床系大学教員と、修士2年生以上の大学院生162名と、実習受け入れ施設32ヶ所に質問紙調査を実施した。その結果、実習のカリキュラムがあ

るのは、学部では49.0%、大学院では81.6%であった。学部レベルでの学外見学や実習を過去に実施していたものの、心理学専攻学生は必ずしも臨床心理学を学ぶために大学院に進学するわけではなく、むしろ実習させることに問題を感じて中止したという意見も挙げられた。次いで、学外実習先としては、精神科が89.8%、児童関係の機関が83.7%、精神科以外の医療機関が61.3%、司法関係の機関が20.4%、老人福祉施設が14.3%、共同作業所が12.2%、その他が51.0%であった。実習パターンとしては、長期的定期型実習が多く、続いて単発型、すなわち、実習というよりも学外見学という範囲の形態が多かった。そして、学部と大学院のカリキュラムの連続性の検討を今後の課題としている。

伊藤ら（2001）も、心理臨床専門機関330機関を対象に、実習生の受け入れについて質問紙調査を実施した。その結果、学部教育に関する今後の課題として、実習の各学年段階における実施意義とその形態の明確化を挙げている。その一指針として、学部教育では、進路決定に資するような見学、体験的実習を、大学院教育では、実質的臨床訓練・教育を目的とした実習の実施を挙げている。

学部における心理臨床実習に関する研究は、非常に少なく、特に、学生が実習から何を学び、何を感じたかなどについて調査した先行研究は、松原（2004）のみである。

松原（2004）は、学部心理学科に設置されている実習科目「病院・施設等実習」の受講生である4年生34名を対象に、実習からの学びを分析した。特に、学生が、実習を通じて何を得て、何を感じ、何を反省点としたのか、その成長の要因について明らかにした。分析には、質問紙は用いず、実習後の口頭発表会での資料を分析した。その結果、実習が学生の成長に及ぼした要因として、①知識的成長要因、②社会的成長要因、③臨床感性的成長要因、④心理的成長要因の4つの要因が挙げられるとした。具体的には、①知識的成長要因とは、「臨床現場での生きた体験を通じて、教科書だけでは理解できなかった現実の精神・心理症状の多岐性を身をもって学んでいる。」というもので、②社会的成長要因とは、「心のケアの奥深さ、作業所や養護学校、病院の存在の重要性を感じている。またそれに反して片寄った予備知識が対象となった人々への思い込みや偏見に繋がったこと、社会や自己の内にあった患者さんや臨床現場、施設への差別感にも対峙し反省している。」というもので、③臨床感性的成長要因とは、「心や精神に対する職種には、知識以外の感性や視野の広さが要求されていることを感じている。」というもので、④心理的成長要因とは、「実習を契機に学生は自分自身と向き合い、自分のものの見方や価値観、日常生活や自らを取り巻く人間関係について振り返っている。同時に自分が臨床現場で働きたいという希望が本物かどうかについても自問

自答している。」である。このように、実習を通じて様々な成長を遂げていることを明らかにし、今後の課題として、各心理臨床現場との協力・密接な連携により、さらなる心理臨床教育における工夫を行なうことの重要性を挙げている。ただし、この研究では、実習での満足度や自己の実習を振り返った自己評価などによる学生の評価傾向は明らかとされていない。

近年、大学の質の保証が求められる中で、大学評価が始まった。それにともない、多くの大学において、大学の授業の改善や社会へのアカウンタビリティ（accountability）のための一手段として、学生による授業評価が実施され始めている。しかし、臨床心理学の演習や実習に関する授業評価に関する先行研究はない。

そこで、本研究では、実際の心理臨床現場で実地体験を行なう目的で子ども心理学科に設置された「子ども臨床心理実地研究」の講義を取り上げ、学生による授業評価の観点を加えて、質問紙調査を行い、結果を授業改善に役立てることを目的とする。さらに、講義終了後、半年たった4年生の後期に同一対象者に対して半構造化面接を行い、学生自身の語りからこの講義の意義について考察することを第2の目的とする。

ところで、子ども心理学科の学生は、教職や心理職を目指すものが多いものの、実際の現場を知り、体験する経験は大学3年生まででない。それまでは、各自がボランティア活動やアルバイトなどで体験的な学習をしている。心理臨床の現場は、実際に学生によるボランティア活動やアルバイトなどを募集しているところは少ない。したがって、本講義は、将来の進路を探索する上で重要な現場体験となるとも位置づけられよう。

以上より、次の2点を研究課題と考えた。①実際の実地において体験学習をするという形式の講義に対する学生による授業評価と学生自身の学びの自己評価の分析と、②研究1の追跡調査としての学生の学びのプロセスの継続的分析である。

したがって、本研究では、これら2つの研究課題の検討のため、同一対象者に対して、研究1と研究2（研究1の追跡調査）の2つの研究を実施

する。両研究ともに、質的研究法を用いて分析をする。質的研究法は、未開分野の探索的研究において有効で、かつ、質的な問いに答えるのに適するとされる研究方法で、プロセスを理解する研究方法として最適であると言われており（能智，2000）、本研究にふさわしい研究方法と考えられた。したがって、まずは、質問紙法による調査を実施し、その記述内容の質的研究（研究1）を実施して、調査対象者の学びの様相を明らかにした上で、さらに研究1の追跡調査研究として、同一対象者に半構造化面接による質的研究（研究2）を実施し、学生の学びのプロセス、及び、進路選択過程を分析する。

Ⅱ. 研究1

1. 目的

実際の実地において体験学習をするという形式の講義に対する学生による授業評価と学生自身の学びの自己評価の分析。

2. 方法

(1) 調査対象者

平成17年度に「子ども臨床心理実地研究」を受講した子ども心理学科3年生15名の内、調査協力が得られた10名。

(2) 調査時期

平成18年1月の最終講義日（3年時学年末）

(3) 調査方法と調査内容

質問紙法による。質問項目は、伊藤（2006a, b, c, d）を参考にして、独自に作成した。

- ①講義全体に対する満足度、及び、理解度（各1項目、5段階評定）
- ②講義に対する振り返り（9項目、5段階評定）：a. 受講態度の振り返り（3項目）、b. 自己学習の振り返り（2項目）、c. レポートに関する振り返り（2項目）、d. 成果発表に関する振り返り（2項目）から成る。
- ③自分自身に対する振り返り（35項目、5段階評定）：a. 不安なことに関する振り返り（13項目）、b. 現実的な負担に関する振り返り（8項目）、c. 自己の向上に関する振り返り（14項目）から成る。

④実地からの学び（8項目、5段階評定）

⑤能力発揮と適性の自己評価（各1項目、5段階評定）

(4) 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的を説明した上、無記名式で、個人が特定されることはないこと、プライバシーは保護されることを説明し同意を得た。

(5) 調査対象講義の概要

①目的

心理臨床が行われている実際の現場に身を置き、体験を通して心理臨床に必要な専門知識・援助技術の内容を深めるとともに、職業倫理を身につけることを目的とする。

②開講形態と対象者

秋セメスター開講、子ども心理学科3・4年生15名（各実地先から最大受け入れ可能人数と指定されたことにより、このような人数制限を実施している）

③講義概要

まずは講義にて、実際の現場に行く前の基本事項を学習し、その後、実地研究として、5ヶ所の学外の心理臨床専門機関での体験学習を行う。各実地に行った後は、その実地先に関するレポートを毎回作成する。さらに、全ての実地研究終了後に、成果発表会（口頭発表）にて、学習体験内容を発表し、成果を確認・共有する。

④実地研究先での体験学習内容の概要

5つの実地研究先とは、医療機関（2ヶ所）、教育機関（1ヶ所）、福祉機関（2ヶ所）であり、各実地先において約半日間程度の体験学習を行った。以下に、すべての実地先で行なわれた体験学習の内容と、各実地先ごとに異なる体験学習内容の概要を示す。

a. すべての実地先で行なわれた内容

- ・守秘義務などの倫理に関する基本事項の話
- ・その実地先の特徴や事業内容の説明
- ・その実地先で対象としている子どもや家族や地域の特徴についての話
- ・その実地内の職員間の連携、及び、心理職の特徴などについての話
- ・子どもへの具体的な心理臨床的アプローチ方

法（実際の治療や援助）の説明

- ・施設見学
- ・その実地先で求められる人材や適性・能力、及び、就職の状況と就職に関するアドバイス
- ・その実地先で行なわれているボランティア活動の紹介
- ・質疑応答

b. 医療機関（2カ所）での内容

- ・子どものみを対象とした総合病院の思春期病棟で、5人1グループになり、病棟内の子どもと話したり、子どもとのレクリエーション活動に参加し、直接的に子どもと関わる体験をした。体験後、質疑応答や感想などを話し合い、学習体験を深めた。
- ・大人を対象とした単科の病院で、思春期病棟も含めた各病棟を幅広く見学しながら、具体的な話を伺った。見学後は、質疑応答や感想などを話し合い、学習体験を深めた。

c. 教育機関（1ヶ所）での内容

- ・適応指導教室で、5人1グループになり、教室を利用している子どもと話したり、遊んだりして下校時間まで過ごし、一日の流れを直接子どもと関わって学んだ。体験後、質疑応答と感想などの話し合い、学習体験を深めた。

d. 福祉機関（2ヶ所）

- ・児童相談所と児童福祉施設で、講義と施設見学を中心に体験学習をした。

以上のように、各実地先での体験学習の内容は、直接的な体験をも含む内容であり、1回のみの体験学習ではあるが、充実したプログラムであった。

(6) 分析

本研究では、履修上の都合により調査対象者が少人数であるため、分析には記述統計を用い、研究2の面接調査のための資料とするために、全体傾向の把握を目的とした。

3. 結果

(1) 満足度、及び、理解度 (Table 1)

満足度の平均は4.30と高い満足傾向が見られた。詳細は、10人中5人が「非常に満足」、10人

中4人が「やや満足」、10人中1人が「やや不満足」という評定だった。理解度の平均についても、3.70と高い傾向が見られた。

Table 1. 満足度、及び、理解度

	平均値	標準偏差
満足度	4.30	0.95
理解度	3.70	0.67

(2) 講義に対する振り返り (Table 2)

まず、受講態度の振り返りの平均は4.33と高く、学生は自己の出席状況や受講態度、実地先での意欲的取り組みについて高く自己評価した。次いで、自己学習の振り返りの平均は2.45と低く、学生はこの講義の予習・復習、授業以外の自己学習についてあまり実施していないと自己評価した。次いで、レポートに関する振り返りの平均は3.60で、学生はレポート作成への取り組み、レポート内容の充実について、やや高い自己評価した。次いで、成果発表に関する振り返りの平均は3.10で、学生は成果発表の準備、発表の出来について「どちらともいえない」という自己評価をした。

Table 2. 講義に対する振り返り

	平均値	標準偏差
受講態度	4.33	0.61
自己学習	2.45	0.76
レポート	3.60	0.81
成果発表	3.10	1.10

(3) 自分自身に対する振り返り (Table 3)

不安なことに関する振り返りの平均が2.33、現実的な負担に関する振り返りの平均が2.26、自己の向上に関する振り返りの平均が3.48と、いずれもやや低い評価であった。すなわち、学生は実地先での体験に対する不安や、自己の体力や気力に対する不安、既存の知識や技術不足に関する不安などについては、ほぼ不安は感じなかったと自己評価した。また、実地先までの交通費などの金銭的負担や、実地先まで行くことの負担や、レポートや成果発表の負担などといった現実的な負担については、ほとんど感じなかったと評価した。次いで、実地先や心理学や子どもの見方などへの興味・関心の広まりや、やりがいの発見などとい

た自己の向上については、どちらともいえないという評価であった。

Table 3. 自分自身に対する振り返り

	平均値	標準偏差
不安	2.33	0.53
負担	2.26	0.43
向上	3.48	0.32

(4) 実地からの学び (Table 4)

実地から学んだことについての8つの質問項目の平均はTable 4に示すとおりであり、「6. 就職に結びついた」「8. 自分が進路選択する際の参考になった」の進路選択に絡んだ2項目以外は、全て4.0以上と高い評価であった。

Table 4. 実地からの学び

質問項目	平均値	標準偏差
1. 現場の状況がわかった	4.60	0.52
2. 臨床の実感をもてた	4.00	0.67
3. 現実的対応が学べた	4.30	0.67
4. 他の専門職種との連携について学べた	4.10	0.57
5. 自分自身についての理解が深まった	4.20	0.63
6. 就職に結びついた	2.90	0.57
7. 自分の職業適性を考える上で役に立った	3.60	0.52
8. 自分が進路選択する際の参考になった	3.40	0.84

(5) 能力発揮と適性の自己評価 (Table 5)

能力発揮の平均は2.58、適性の平均は3.06であった。すなわち、学生は実地先において自己の能力がやや発揮できなかったと自己評価し、心理臨床現場という実地における自己の適性はどちらともいえないと自己評価した。

Table 5. 能力発揮と適性の自己評価

	平均値	標準偏差
能力発揮	2.58	0.78
適性	3.06	0.49

4. 考察

多くの学生が、本講義に対して満足度と理解度ともに高く認知したことが伺えた。受講態度やレポート作成についての高い自己評価は、受講生のモチベーションの高さの反映と考えられる。一方、自己学習や成果発表の取り組みについてのやや低い自己評価は、実地体験での学びをさらに展開・応用して自ら学習したり、成果をまとめて口頭発表するまでは達していないことが反映していると思われる。これは、自己の向上についての評価が

3.48という平均であったこととも関連していると思われる。

次いで、実地体験に対する不安や現実的な負担は、ほとんど感じていないことが伺えた。

しかし、実地体験においては、自己の能力がやや発揮できなかったと評価していた。よって、この結果は、不安や心配によって自己の能力が発揮できなかったのではなく、初めての現場で臨機応変さを求められた時に能力発揮できなかったことが反映していると考えてよいかもしれない。

実地からの学びについては、進路選択に絡んだ項目以外はほぼ学ぶことができたと高く評価している。これは、3年次ゆえに、まだ進路が定まっていなかったために進路選択との兼ね合いについては吟味が充分できず、自己評価が低かったと考えられよう。また、必ずしも全員が将来の進路として心理職を希望しているわけではないため、希望進路と直結しないと感じた学生もいたことが反映しているとも考えられよう。そして、この結果は、心理臨床現場という実地における自己の適性を「どちらともいえない」と評価していることとも関連すると思われた。

本講義は、実習という位置づけではないため、受け身の受講態度であっても、ある程度の学習成果を得ることができる。しかし、個人による学習差が出るのは、予習や復習や自己学習をすすめるなどの個人の努力やその実地先でのコミットメントの大きさなどの影響と思われる。さらに、中には、実地での知見をより発展的に今後活かすということにつながらず、その場での体験で終わってしまっている者もいると考えられよう。このように、実地研究から何を得るかは、各個人の意識に大きく影響していると考えられた。よって、前述のいくつかの先行研究に見られたとおり、今後は、より事前指導を充実させ、より問題意識を持って実地に望むような指導が必要かもしれない。すなわち、その実地の文献研究、問題や課題の事前調査、質問事項の準備などが考えられよう。

鶴田(2001)は自らの学生相談の臨床経験から、本研究の調査対象者である大学3年生について、大学生活への初期適応が終わり、将来の進路選択

などを始め、自己探求が課題となる学年としている。続く大学4年生は、卒業という終点を意識しながら、学生生活を振り返り、自分にとっての学生生活を意味づける作業を行い、卒業していく学年であり、進路や将来が大きな課題となる時期としている。そして、大学でのキャリア教育の重要性を指摘している。具体的には、大学3年生では、自己分析（興味・関心、性格、人間関係、能力など）やキャリア体験を通して、自分と将来のキャリアの関係について検討していくことがキャリア教育の課題としている。大学4年生では、自分のキャリアプランニングと職業とを結び付け、卒業後の進路を具体的に検討し、決定することをキャリア教育の課題としている。そして、キャリア教育は、「就職活動の援助・指導だけではなく、個人の発達の視点から見ると教育的要素が大きいものである」とし、ゆえに、全学的なカリキュラム化の必要性を提案している。この観点から考えると、本講義が学生のキャリア教育をも担っているといえよう。そして、キャリア形成のプロセスに焦点をあてて、本講義の分析を行なうことが今後の課題と考えられる。したがって、以上のような課題の検討も含めて研究2を実施する。

なお、本研究では、Hall (1994) による「キャリア」の概念を用いた。すなわち、キャリアを「単に仕事を意味するものではなく、人生と深くかかわる『人の生き方そのもの』であるとし、生涯にわたってキャリアは様々な要因と関連しあいながら変化発達するもの」とする考え方である。キャリアの概念については、日本においては今だ統一された概念はない。キャリアの概念では、職業的発達理論の立場によるSuper (1957) の概念が有名であり、キャリアを「人々が生涯において追求し、占めている地位、職務、業務の系列」とし、職業的発達を職業適応と自己実現との関係性の洞察の過程としている。しかし、Superの概念、及び、理論は、時代の流れに呼応して変化してきており、近年では、職業上の経歴のみを意味するのではなく、「その人自身の行き方そのものとその表現のしかた」として統合的にとらえられるようになってきたため、本研究では、Hallの概念を用いた。

Ⅲ. 研究2

1. 目的

研究1の追跡調査としての学生の学びのプロセスの継続的分析。

2. 方法

(1) 調査対象者

研究1の調査対象者10名の中で、研究1の調査時の進路希望が小学校教諭だった者と、幼稚園教諭だった者と、大学院進学だった者と、心理・福祉職だった者と、未定だった者で、調査協力を得られた者、各1名ずつ合計5名が研究2の対象者として抽出された。これらの5つの進路希望は、毎年子ども心理学科において多くの学生が希望する傾向が見られるものであり、本学科の進路希望を反映しているものと考えて取りあげた。

(2) 調査時期

平成18年10月初め（4年時秋セメスター講義開始前）

(3) 調査方法と調査内容

個別に半構造化面接を実施。面接の質問項目は、研究1の結果をもとにして、独自に作成した。具体的には、研究1の結果から、講義と進路選択過程との結びつきの強さが伺えたため、この点に焦点を当てた以下の質問項目とした。

- ① 3年時に履修した「子ども臨床心理実地研究」の講義を振り返り、何を学んだと思うか
- ② この講義をきっかけにして変化したことから
- ④ 講義や演習によって得た知識と、実際の現場体験とを結びつけることはできたか
- ⑤ 現場を知る体験は、どのような意義があったか
- ⑥ 今までの進路選択過程
- ⑦ この講義が、今現在の進路選択過程に与えた影響
- ⑧ 3年時に履修したことのメリットとデメリット

(4) 手続き

1対1による半構造化面接を実施した。面接は録音し、逐語録を作成し、分析資料とすることについて、調査協力者の了承を得てから面接を実施した。面接時間は、20分から60分であった。

(5) 分析

逐語録から、1年前に受講した講義の振り返り

に関する内容と進路選択過程に関する内容を抽出して分析した。本研究では、進路先別による分析は行わず、全体的な傾向を探ることを分析目標とした。

3. 結果と考察

(1) 進路選択過程と講義での学びとの関連 (Table 6)

5名ともに、入学前から心理学に興味・関心を持ち、かつ、将来は子どもとかかわる仕事をしたいという志望を持っていた。入学からの進路選択のプロセスを見ると、希望進路が多少変化した者がいるものの、全員、前述のとおり心理学を活かした、子どもとかかわる職業志望という点には変化は見られなかった。特に、講義受講時である3年次の後期講義開始時と、本面接調査実施時である4年次の後期講義開始時とを比較すると、3年次に心理・教育系の職を希望しており、4年次に進路志望は未定である者（以下、No. 5と示す）1名を除いて進路選択に変更はなく、むしろその進路志望を強めていた。

その進路選択のプロセスにおいて、本講義がどのような影響をどの程度与えたかについては、各自の意見が異なった。まず、3年次から4年次にかけて一貫して幼稚園教諭を希望している者（以

下、No. 2と示す）1名を除く4名は、6割から9割という高いプラスの影響を受けたと語った。その影響は、3年次から4年次にかけて一貫して小学校教諭を希望している者（以下、No. 1と示す）は、「小学校現場も、実地先と同様に、様々な子どもへの対応を求められるため、実地先での知見は小学校現場での実践に役立つと思えた」というものであった。3年次に医療現場の心理職を希望していた者（以下、No. 3と示す）は、「福祉現場での実地体験からの影響が大きく、特に進路を見つめなおす機会になり、進路先として福祉現場をも視野に入れるようになった」と、進路選択の幅の広がりやプラスの影響と語った。また、3年次から4年次にかけて一貫して大学院進学を希望している者（以下、No. 4と示す）は、大学院終了後の進路として医療現場での心理職を目指しており、「医療現場での実地体験により、大学院進学希望がますます強まり、大学院受験へのモチベーションが上がった」と語った。さらに、No. 5は、「様々な実地体験ができ、講義への満足度は非常に高いものの、それらの体験を自分の中でうまく消化しきれていないため、どのようなことを学んだかは明確化できない」と語った。このNo. 5に見られる語りからは、実地での学びをす

Table 6. 対象者のプロフィール：進路選択過程と講義との関連

No	希望進路			講義による進路選択過程への影響	影響の程度	理由	講義以外で進路選択に影響した要因
	入学時	講義受講時 (3年後期 開始直前)	面接調査時 (4年後期 開始直前)				
1	小学校教諭	小学校教諭	小学校教諭	様々な子どもがいることを知り、多角的に物事を考える視点を養えた	70%	小学校現場も様々な子どもに対応を求められるため、現場を知り、役立ったので	小学校の担任教諭へのあこがれ（小学校6年）→心理学への興味関心の高まり（大学1年～）
2	企業を含めた子どもに関わる職	幼稚園教諭	幼稚園教諭	リアルな現状を体感した	30%	幼稚園教諭という進路と実地先は、直接結びつかなかったため	幼稚園教諭免許取得に向けての勉強（大学1年～）→保育所でのアルバイト（大学3年～）→幼稚園実習（大学4年）
3	小学校か幼稚園教諭	医療現場の心理職	医療・福祉現場の心理職	希望進路先として福祉職も視野に入れて考えるように広がった	90%	福祉現場での実地先での体験が大きく、進路を見つめなおす機会になったため	医療現場でのボランティア（大学1年～）→保育士資格取得に向けての勉強（大学3年～）
4	小学校教諭	大学院進学	大学院進学	進路があらためて確定した、心理職の幅の広さを知った	60%	現場のことを知ることができ、現場と既存の知識とのギャップを知ることができたため	小学校教諭免許取得に向けての勉強（大学1年～）→医療現場での心理職希望の強まり（大学3年～）
5	未定（教育について学ばない）	心理・教育系の職	未定	よくわからない	60%	様々な体験をしたが、その体験を自分の中で消化しきれていないため	小学校教諭免許取得に向けての勉強（大学1年～）→免許取得の取り消し（大学2年）

ぐに明確化できなくても、今後明確化していくことにも意義があろうことを伺わせた。さらに、実地での心理臨床の体験学習で学生は、普段の対人的関わりの体験などとは異なり、より専門的な関わりを求められる。ゆえに、No. 5 は、「各実地に行った後は、ボーっとすることが多かった。心地よいものであったが。」とも語っており、自己の内面が揺さぶられる体験をし、今まで体験したことのないものであるゆえ、それを意識化・言語化できないと認知しているものと思われた。この語りより、実地体験の学びをすぐに進路選択過程に直結させることに価値があるわけではなく、長期的に明確化させていくことにも意義があることや、今までと異なる体験ができたこと自体にも十分な意義があることが示唆された。

残るNo. 2 の1名は、30%の影響力だけだったとし、「幼稚園教諭という進路と実地先とは、自分の中では直接結びつかなかった」と語った。

次いで、本講義以外で進路選択に影響した要因を見ると、5名にほぼ共通するのが、大学入学後の免許取得に関わる勉強と、それに関連する現場でのボランティア体験や、心理学への興味・関心の強まりという特徴であった。この結果は、ボランティア活動が本学子ども心理学科の学生に与える影響について調査した伊藤（2006b）の研究で明らかとされた結果と同様といえよう。

(2) 今までの学びと実地体験との結びつけ、及び、現場で学ぶことの意義 (Table 7)

既存の知識や経験と実地先での体験を結びつけ

ることができたか聞いたところ、「できた」と答えた者は2名で、「できなかった」「難しかった」と答えた者は3名であった。「できた」者のその理由は、「もともと知識があった上で現場の話を聞き、体験学習したので興味・関心がさらに高まった (No. 2)」や、「もともと保育士資格を独自に取得しており、そのための勉強や体験が役立った (No. 3)」と語った。そして、現場で学ぶことの意義について、「自分個人では見学したり子どもと関わるができない現場に行くことができ、将来、幼稚園教諭から心理職に転職する可能性も考えている自分にとっては貴重な知見を得ることができたこと (No. 2)」、「将来の進路を考える機会となり、自分の行きたい道を見つめる良い機会となったこと ((No. 3))」と語った。このように、進路が明確化し、かつ、両者ともにボランティアやアルバイトで子どもと関わる経験を長期的に持っている学生ゆえに、進路選択に焦点化された語りが見受けられた。

一方、「できなかった」者のその理由は、「既存の知識の定着が浅いので、実地体験中にすぐに今まで学んだ事を思い出せなかった (No. 1)」や、「いざ実地現場に入って、自分がかかわる子どもの特徴を聞いても、すぐに既存の知識とリンクさせることができなかった (No. 4)」や、「まずは現場を見てみたいというのが、本講義の受講目的だったので、今までの学びと実地体験とを結び付けようとする気が全くなかった (No. 5)」というものであった。そして、現場で学ぶことの意義に

Table 7. 既存の知識・技術と実地体験との関連、及び、現場で学ぶことの意義

No	学びと実地の結びつけ	その理由	現場で学ぶことの意義
1	できなかった	既存の知識の定着が浅くて、できなかったし、学んだことをすぐに思い出せなかった	物事を考える幅が広がったこと、臨機応変に対応することの重要性を知ったこと
2	できた	知識があった上で現場の話を聞いたので、興味・関心がさらに高まった	個人では見学などができない現場に行くことができたこと、将来幼稚園教諭以外の職に就くことも考えているので、様々な現場を見ることができたこと
3	できた	保育士資格を取得しており、そのための勉強や体験が役立った	将来の進路を考える機会となり、自分の行きたい道を見つめる機会となったこと
4	難しかった	いざ現場に入って、子どもの特徴などを聞いても、すぐに既存の知識とリンクできなかった	希望進路の現場を見ることができて志望がより強まったこと、今まで大学院の勉強を優先と考えてボランティアをやらなかったが、実地で子どもと接したらもっと自分が子どもに対して何かできることがあるのではと気づいたこと
5	できなかった	まずは現場を見てみたいと思っていただけなので、学びと現場の体験を結びつけようとしなかった	心理・福祉職の仕事内容のイメージが明確化したこと、講義で聞いたこととイメージが違っていてそのズレを知ることができたこと

については、「物事を考える幅が広がり、臨機応変に対応することの重要性を知ることができたこと (No. 1)」や、「自分の希望していた進路先の現状を見ることができて、志望がより強まった。今まで、大学院の勉強を優先と考えてボランティア活動などをやらなかったけれど、実地先で子どもと接してみて、もっと自分が子どもに対して何かできることがあるのではないかと気づかされた (No. 4)」、「心理・福祉職の仕事内容のイメージが明確化した。講義で聞いた事柄と現場とに違いはなかったが、講義で聞いた事柄から抱いたイメージと現場が違っていて、そのズレを知ることができたこと (No. 5)」という語りが見られ、既存の知識や経験を実地での体験に結びつけたり、活かすことはできなかったと語ったものの、新たな気づきや自己発見があったというような語りが見受けられた。以上から、既存の知識や体験の差による影響が少なからず伺えた。

以上より、学生によっては、今までの講義での学習内容を応用し、分析・展開させ、現場に活かすまで発展できていないことが伺えた。受講生の既習知識・技能には大きな幅があり、かつ、心理臨床現場に行くこと自体が初めてという学生が多いため、既存知識・技能と現場での心理臨床体験とをすぐに結びつけ、さらに応用させる応用力を求めることを本講義の目的とすることはやや難しさがあることが示唆された。むしろ、「興味・関心の幅が広がった」「新たな気づきがあった」「見学すること自体が有意義だった」というような学生の語りの多さから、学生にとっては、未知の現場体験によって、心理臨床に強く興味・関心を持

て、高い満足度を得ている点を重視する必要性が示唆されよう。以上の結果は、前述の伊藤ら (2001) の先行研究で今後の課題として示唆されたように、学部生にとっては進路決定に資するような見学、体験的実習に意義があり、その基礎学習をもとにして大学院教育で、実質的臨床訓練・教育を目的とした実習を実施することに意義があるということをまさに表しているといえよう。

(3) 3年次に履修したことのメリットとデメリット (Table 8)

まず、進路志望が明確であった者2名の語りをみると、メリットは、「進路を見つめなおす良い機会になった (No. 3)」、「3年次という真剣に進路選択を考え始める時期に、実地研究から良い影響をもらえたこと (No. 4)」という進路選択過程へのプラスの影響があったことであった。一方、デメリットは「ない」と語り、「4年次の履修では、進路を考える上で遅いと思う (No. 3)」、「2年次の後期の開講でも良いのではないか (No. 4)」という指摘・提案も語られた。

他に、進路はまだ未定とした者 (No. 5) は、メリットは「早い時期に現場を見ることができ、自分の興味・関心の内容が変化し、実際の子どもの理解がさらに深まったこと」で、デメリットは「現場での知見が自分の中で明確化しなかったことがあったこと」と語り、やはり4年次の履修では遅い点を指摘するとともに、「自分は、もっと充分に勉強してから現場に行った方が良かった。勉強が足りていない。」と語った。

その他、小学校・幼稚園教諭志望者2名は、メリットとして「教職に関する教科の講義をたくさ

Table 8. 履修時期のメリット・デメリット

No	メリット	デメリット	提案・課題
1	様々な講義を受けながら、実地に行くことができたこと	時間割上、非常に忙しかった	仲間意識が高まったため、少人数制が良い
2	3年次は時間割上や自分に余裕があるし、他の受講生も3年が多いので安心感があったこと	なし	4年は実習や卒業研究があるので忙しく、余裕をもって学べないと思う
3	進路を見つめなおす良い機会になったこと	なし	4年次の履修では、進路を考える上で遅いと思う
4	3年次という真剣に進路選択を考え始める時期に、実地研究から良い影響をもらえたこと	なし	4年の後期は、進路が決まる時期だから、4年次の受講では遅すぎる。2年次の後期に開講でも良いかもしれない。
5	早い時期に現場を見ることができ、自分の興味・関心の内容が変化したこと、実際の子どもの理解が深まったこと	現場での知見が自分の中で明確化しなかったことがあった	4年次の履修では、就職活動との兼ね合いで遅すぎると思う。 充分勉強してから現場に行った方がよい

ん受けながら実地に行くことができたので、幅広くいろいろなことを学べたこと (No.1)」、「3年次は時間割上や自分自身に余裕があること (No.2)」と語り、デメリットとして「時間割上、非常に忙しかった (No.1)」と教職課程の履修状況と関連させて語った。また、「少人数制であったため、仲間意識ができた (No.1)」、「受講生が自分と同学年の人ばかりだったので安心感があった (No.2)」という語りも見られた。この講義では、成果発表があり、集団を前にして自らの体験を語り、かつ質疑応答も要求されるため、受講生にとっては、講義を聴くという受け身での受講だけでは済まず、また講義の性質上、発表場面では自らの内面を語ることも出てくる。よって、このように集団の質に関する内容の語りが見られたといえよう。この点は学生の学びに影響する要因の一つと考えられ、今後の授業改善に反映させていく必要性が示唆された。

Ⅳ. 全体考察

1. キャリア形成支援からの考察

前述の松原 (2004) の先行研究では、実習が学生に及ぼす成長要因として、①知識的成長要因、②社会的成長要因、③臨床感性的成長要因、④心理的成長要因の4つを挙げていた。本研究の語りの中でも、まさにこれら4つの要因が見受けられた。しかし、本研究においては、さらに、キャリア形成のプロセスにおける成長に関する語りが多く見受けられ、キャリア形成的成長要因と新たにカテゴリー化できると思われた。

以上のように、本講義は学生にとって、キャリア形成過程の一助ともなっていることが明らかとなった。これより、本講義は、キャリアカウンセリングも含んだキャリア教育実践と位置づけることも可能であると思われる。よって、今後も受講学生のニーズを把握し、個別支援も含めたキャリア形成を促すためのサポートを含めたキャリア教育としての役割も重視することの必要性が示唆された。

2. 学習コミュニティという学習観からの考察

今後の授業改善の点から考察すると、大塚

(2005) の研究が参考になる。大塚は、自らの授業改善実践の中で、大学の授業は「講義形式の授業にせよ、演習方式の授業にせよ、教師と学生の間のある種の相互作用のあり方を無視することができない」と指摘している。そして、そのような人的つながりを「学習コミュニティ」と概念化した。「コミュニティ」とは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」と定義し、実践コミュニティが対象とする領域を学習の場とするとき、それを「学習コミュニティ」と呼ぶとしている。そして、学びの成立には、そこに一定の学習コミュニティが形成されることが前提で、そのコミュニティにおける自らの役割を明確にしていくプロセスが学びととらえる。具体的には、学生が授業とかかわる中で、学習コミュニティに自らがしっかりと位置づいている感覚がもて、その授業に関連する領域の大学院進学を考えたり、その領域の課題を取り上げて卒論をまとめようと考えたり、また、そのクラスの他の学生とそのテーマに関して話し合ったり、教えあい、学びあうということが起こり始める。このような学習コミュニティへの帰属がある形で起こり、それへの関与が高まること自体が「学び」としている。この学習観にもとづくと、教師の役割は、学習コミュニティを授業の場に作り上げ、そのコミュニティの場に多くの学生を引き込んでいくということだと指摘する。その上で、授業評価は、学習コミュニティ形成のツールとして、教師と学生、あるいは、学生同士のコミュニケーションを確保するために利用すべきであるという見方を提唱している。この実践は、最近では「参加型授業」で、学生自身が班などを構成することによってお互いに学びあい教えあう機会を導入するような授業形式においてなされているという。

この学習観は、まさに本講義の実践の検討に有益な視点を含んでいる。すなわち、まさに本講義において実践され、かつ、研究1と2において検討した点である。具体的には、3年次に履修したことのメリットとデメリットに関する学生の語り

にも見られたように、本講義が少人数での受講であり、かつもともと講義へのモチベーションの高い集団による学習コミュニティが形成されており、そのコミュニティでの学習過程と学びが充実しており、さらに、レポートや成果発表によってコミュニティ内で体験の共有化を密に実施するなどという形で講義が進められていると分析することができよう。そして、今回の2つの研究にてその効果が見受けられたといえよう。この観点は、今後の授業改善のためにも有益であると思われる。

3. 学部段階での現場体験の意義からの考察

下山(2003)による臨床心理実習の理念と方法の研究において、学部段階で学習する必要があるのは、「人間関係を構成する技能と、人間関係のなかで自己の心の動きをモニタリングできる技能」と「相手に関わりつつそこで生じていることを把握する参与観察の技能」としている。そして、これらの技能は、ある程度技能実習として構成された体験学習を通して学ぶことになるとしている。さらに、施設見学やボランティア活動などによって社会体験を積むことは、学生の人間的成長を促すとともに、臨床心理学の専門活動に必要な社会性の基礎を育むと指摘し、臨床心理学の関連フィールドでの見学・参加学習の重要性を挙げている。これらは本講義の「実地研究」にまさに当てはめて考えることができ、学部学生に適した学びを提供できているものと考えられよう。今後は、さらに学生各自がより良い進路選択ができるようなサポートの必要性が示唆される。

引用・参考文献

- Hall, T. 1994 Career in Organization, Goodyear Publishing Co. Inc. Pacific Plisades
- 伊藤嘉奈子・入江礼子・塩崎万里・田中奈緒子・坪井寿子・富田庸子・松永しのぶ 1999 女子大学生の職業選択過程に関する基礎的研究—鎌倉女子大学における教育・福祉関係への就職希望者を中心に— 鎌倉女子大学紀要, 6, 79-96.
- 伊藤嘉奈子 2006a 鎌倉女子大学における心理学専攻学生によるボランティア活動のもつ意味—実態と今後の支援について— 鎌倉女子大学紀要, 第13号, 15-26.
- 伊藤嘉奈子 2006b 児童学部学生のボランティア活動からの学び 児童学研究, 第85巻, 13-23.
- 伊藤嘉奈子 2006c 平成17年度後期授業の点検と改善—学生による授業評価結果と教員のコメント—「心理学A」 千葉大学普遍教育センター, P.71.
- 伊藤嘉奈子 2006d 平成17年度後期授業の点検と改善—学生による授業評価結果と教員のコメント—「心と行動と社会」 千葉大学普遍教育センター, P.141.
- 伊藤直文・村瀬嘉代子・塚崎百合子・片岡玲子・奥村茉莉子・佐保紀子・吉野美代 2001 心理臨床実習の現状と課題 学外臨床実習に関する現状調査 心理臨床学研究, 19, Vol.1, 47-59.
- 松原由枝 2004 臨床心理学実習が学生に及ぼした成長要因 川村学園女子大学紀要, 15, Vol.1, 43-54.
- 西まゆみ 2004 臨床心理士指定大学院における「臨床心理基礎実習」の授業運営に関する考察 安田女子大学紀要, 32, 61-68.
- 日本心理臨床学会職能委員会 2001 これからの臨床心理実習：現状と課題 心理臨床学研究, 19, 特別号, 47-65.
- 能智正博 2000 質的(定性的)研究法 下山晴彦(編) 臨床心理学研究の技法 福村出版, 56-65.
- 大塚雄作 2005 学習コミュニティ形成に向けての授業評価の課題 溝上慎一・藤田哲也(編者) 2005 心理学者, 大学教育への挑戦 ナカニシヤ出版, 1-42.
- 下山晴彦 2003 臨床心理実習の理念と方法 下山晴彦(編) 臨床心理学全書4 臨床心理実習論 金子書房, 1-36.
- Super, D.E. 1957 The Psychology of Careers. , New York : Harper., 日本職業訓練協会訳 1960 職業生活の心理学 誠信書房
- 鶴田和美(編) 2001 学生のための心理相談 培風社

要旨

本研究においては、子ども臨床心理実地研究の講義は学生にとってどのような意義があったのか、また、この講義を通じて、各自の進路選択過程にどのような影響があったのかを明らかにすることを目的としている。そのために、学生による授業評価と面接調査を実施し、実証的に分析・検討を行なった。その結果、ほぼ全員の学生が、本講義に対して満足度が高かったと評価した。さらに、本講義における心理臨床の実地体験と、既存の知識や技術とを結び付けてさらに学びを深めることの難しさが示唆された。さらに、学生各自がより良い進路選択ができるようなサポートの必要性も示唆された。

(2006.10.30 受稿)